

居場所づくりと青少年育成の考え方

西村 美東士

(徳島大学大学開放実践センター教授)

一 青少年育成への機軸としての「居場所」論

私は一九八九年度から総務庁青少年対策本部「青少年問題に関する文献集」の「社会」と「文化」の分野の文献の要旨を作成してきた(注参照)。それによると、題名や要旨に「居場所」という言葉を含む文献は、九七年から増加している。

九七年には、中・高校生建設委員会の基本設計による東京都杉並区児童青少年センター「ゆう杉並」が開館し、彼らの地域での居場所が目指された。九八年四月、内閣総理大臣の下、関係協議会の代表者等の有識者から成る「次代を担う青少年について考える有識者会議」が「学校外での青少年の居場所づくり」を提言した。翌年、兵庫県社会教育委員の会議報告が、

「神戸市須磨区の事件以来、『心の教育』の一層の充実を図ることの大切さを改めて認識」し、青少年の心の居場所の重要性に注目した。その後、各地で「居場所づくり」を必要とする客申が出された。同年一〇月には、東京都社会教育

委員の会議が「中・高校生の自立的・自発性を育てるためには、青少年が気軽に立ち寄り、若者文化の発信や受信ができる居場所をつくる」とや、中・高校生世代が主体的に参加できる機会を設けることが必要」とした。その後、翌年にかけて、川崎市青少年問題協議会、愛知県青少年問題協議会、茨城県青少年問題協議会、東京府青少年問題協議会が、

「居場所づくり」が必要であるとした。繰り返し起こる青少年問題のなかで、青少年施策は「居場所が大切である」という認識にとどまらず、「居場所をつくる」という能動的行為に進みつつあるといえる。

他方、最近の「居場所論」においては、教育や育成のためのいやや懐疑の傾向が見られる。藤原建次郎「若者にとつての『居場所』の意味」

(日本社会教育学会紀要、一九九七年)は、「多くの若者はそのような『意図的・操作的な教育意志』によって教育過程に引き込んでいくような『教育的まなざし』に満ちた場には寄りつこう

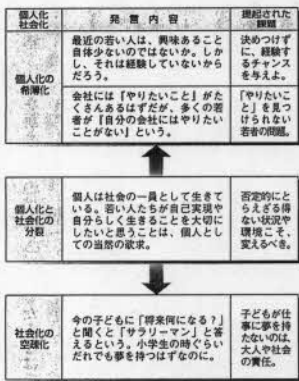


図1 個人化と社会化の分離

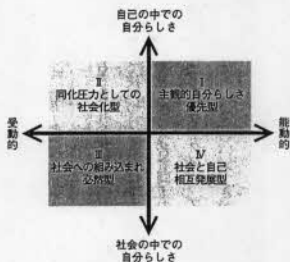
とはいらない」と警告した。久田邦明編「子どもと若者の居場所」(明文社、二〇〇年)は「これまでの『青少年健全育成の』施策が有効性をもたなくなっている」とし、田中治彦編「子ども・若者の居場所の構想」(学陽書房、二〇〇一年)は、その副題を「教育」から「関わり」の場へ」とした。

しかし、同様の議論は過去にもあった。一九七〇年代に入り、いくつかの公民館等で若者のたまり場づくりが行われる。そのときすでに、平林正夫は国立市公民館青年室の自らのたまり場づくりの実践をふまえ「あまりにも意図的な教育が自ら形成を疎外している」とたまり場以前の教育を批判し、「生きられる空間」提供の意義を主張している(高橋優悦編「青年そして都市・空間・情報」恒研社厚生閣、一九八七年)。これに対し、私は居場所づくりにおいてこそ、あらためて教育や育成の意義が重視されなくては考えている。

二 個人化と社会化の分類状況

先の日本産業教育大会第四回大会で、私はラウンドテーブル「最近の若者の労働観と生き

図2 社会化の類型



方を考える」を主導した。そこでは仮説を以下のように設定した。「職業生活への適応をはじめとする青少年の『社会化』は青少年自身のニーズでもある。しかし、他方で、彼らは『できれば自分のために働きたい』という希望をもっている。『自己実現や自分らしさを大切にしよう』とするゆえである。これらの『個人化』傾向を肯定的に理解することによって、現代青少年の望ましい社会化を支援することができるとはならないか。」

図1は本仮説に関わる発言内容を、個人化／社会化の視点で整理したものである。議論の過

程で、個人化の進行ではなく、むしろその希望化こそが問題とされたことに注意されたい。青少年の社会化は促進しようとするのに、個人化については「それを否定的にとらえる得ない状況や環境」こそ、批判的に点検し直す必要がある。

三 個人化と社会化の関係の類型

私は、授業で「自分らしさを育てること」と、社会性を身につけることとはどういう関係にあるか」についての学生の記述内容を分析し、その類型を図2のようにまとめた。Iの学生は「社会性が身につけていてもいなくても、それがそのまま自分らしさ」、IIは「他人と違う行為や言動で仲間から外されるという恐怖があつて自分の意見をいえない」、IIIは「社会性を身につけたうえで、社会に受け入れられる自分らしさでない」と価値がない、IVは「健全な両者を持つということは他者へも良い刺激となり、再び自分へつながる」という。

しかし、どの学生も、就職をはじめとする自己の社会化を、自らの課題として真剣にとらえていた。これらのことから、青少年育

表1 居場所の種類

	種 類	例
無意図の居場所	対自（自分に向き合う）	自分の部屋、ひきこもり、黙想、音楽、散歩
	対他（他者とかわる）	友達の家、街頭、インターネット通信、（家族）
	対社会（社会にかかわる）	地域活動、ボランティア活動、市民活動、（学校・職場）
意図された居場所	対自他・対社会	公民館、青少年施設、地域施設、青少年育成活動等
	主催事業	各事業目的のもとに行われるが、そこが自他受容の場にもなる。
	活動拠点	集まってある目的を実現しようとする。団体への施設提供など。
	たまり場	集まっているうちに何かやろうとする。特定の部屋の開放など。
	居場所（狭義）	居場所であることと自分が主要な目的である。自助グループなど。

成において社会化機能がむしろ積極的に發揮されることが若者自身からも求められていると考えられる。ただし、それは現代青年のこのような「自分らしき願望」の種類や構造に対する的確な理解に基づいて行われることが必要である。たとえば、Ⅳが最終の到達目標というわけではないだろう。Ⅳには、実際に自分らしきの危機に陥ったときに、その事実を認めようとしなかったり、挫折したりする恐れもある。むしろ、

仲間や指導者との出会いや気づきのなかで、この四象限のあいだを循環して発展していくものと考えられる。

また、Ⅰの若者を「社会化の可能性が少ない」となど先入観で決めつけることはできない。実際には、Ⅰの若者はむしろ若者同士の中でのリーダーシップに優れ、ワークショップ型の授業によって社会化への望ましい気づきが効果的に行われたことがわかったのである。

四 個人化ノ社会化機能の統合的發揮

育成や教育の意図が働いていない居場所も含め、「自分らしき居場所の種類を表現」のように把握しておきたい。そして、意図的にそういう居場所をつくらうとする場合は、個人として深まること（個人化）と社会的な資質・能力を身につけること（社会化）を統合的に進めるよう配慮することが、若者のニーズに的確に応えることにつながる。

そのためには、居場所をとらして得られる図3のような「気づき」の構造を理解し、支援する必要がある。ここではおのおの種類の気づきが自己完結せずに、他種の気づきとスムーズ

図3 気づきの循環



に循環するよう支援するところこそ、育成や教育の「意図」が介入することの意義があるといえよう。即自から対自へ、対自から対他へと気づきが促される過程とともに、対他から再び対自や即自（あるがままの自分のより深い気づきへと循環する過程が重要である。

〔注〕科学研究費補助金「研究成果公開促進費」を受け、その成果をWEB上で「青少年問題に関する文献データベース」として公開していますのでご利用ください。徳島大学大学開放実践センターの筆者のホームページからご覧になれます。